藤枝静男「空気頭」論――結核菌と他者

西田　一豊

一　「空気頭」

藤枝静男の「空気頭」は「群像」昭和四十二年八月号に掲載され、同年十月に講談社の同じ表題の作品集『空気頭』に収められた。それまでの藤枝の諸テクストが、自身の近辺に取材したリアリズム小説が多かったと言う意味で、「私小説」[1]的要素が濃厚だったのに対して、この作品集『空気頭』はそこから逸脱するようなテクストが含まれることとなった。それは例えば「凶徒津田三蔵」（「群像」昭和三十六年二月号）や「犬の血」（「近代文学」昭和三十一年十二月号）といったような、作者藤枝の体験を離れた題材を扱っているテクストであるという意味ではなく、それまでの「私小説」と地続きでありながら、そこから次第にズレが生じ始め、現実なのか夢なのか判断しがたい次元へと小説が進んでいくという種類の逸脱である。もちろんこうした逸脱やズレを感じてしまうのは、それまでの藤枝の諸テクストとの関係からなのだが、しかしそれは言い換えれば『空気頭』が藤枝のテクスト群において新たな境地を示すものであったといえるだろう。

ただし「空気頭」に関していえば、気頭療法や糞食を扱った第二部[2]は既に先行するテクストを持っている。それは現在のところ確認されている範囲で[3]「空気人形」（「みづうみ」昭和二十六年二月号～七月号）、「空気頭」（「近代文学」昭和二十七年三月号）、「気頭術（多田の二つの発明について）」（「医家芸術」第二巻第二号・昭和三十三年二月）の三テクストである。またその内容に関しても作者自身によって下敷きとしたテクストが言明されており、第二部に関してはその成立過程にやや入り組んだ点があるものの、現「空気頭」に繋がるテクストの行程は大まかにではあるが把握することができる。この点については後にまた見ることにする。

さて「空気頭」は以上のように藤枝のテクスト群の中では新しい点と同時にプレテキストが存在しているという意味でなじみのあるテクストであるのだが、このテクストが発表当時、読者にどのような反応を起こしたのかということを同時代評に見てみよう。同時代評としては、新聞・雑誌等の書評欄で多く取り上げられており、その多くは「空気頭」を高く評価するというものであるが、しばしば取り上げられる問題点は、「私小説」の問題、性の問題、老いの問題という三点である。以下その代表的なものとして二つの書評を挙げておきたい。一つは安岡章太郎の「失われし自己を索めて」（「朝日ジャーナル」昭和四十二年十二月三日号）である。

物語の主人公は、結婚後間もなく結核で寝こんだ妻と二十数年つれそっている田舎医者であり、その医者が戦中、戦後の混乱期にいく人かの女性と性的交渉をもちながら、肉体の老化とともに、現在にひどく空虚なおもいで生きているという、いわば典型的な自然主義風の私小説なのであるが、それはこの小説の

中核になっている「意識」を包むマンジュウの皮の役割にたとえられるものだ。中身のアンコは、つまりこの男の情欲であり、それに従って起こるさまざまな奇怪な行為である。

安岡は「いわば典型的な自然主義風の私小説」として性と老化の問題点を「空気頭」に読むが、それは表層的事象だとしてテクストの「アンコ」を語り手「私」の「奇怪な行為」にあるとしている。ただ安岡はそのようなものとしてテクストを認めながらも、その「奇怪な行為」における主人公の倫理観が単に痛点としてのみあるだけで、それが自然回帰といった道程の一部であるとしても、その過程が省略されすぎており、「極めて淡泊なもの」として描かれているのを不満としている。すなわち安岡もまた先に述べたようなズレに戸惑っているといえるだろう。それは「典型的な自然主義風の私小説」であるはずのものが、その帰結としての自然回帰へと円滑に繋がろうとはしないことへの違和感といってもよいかもしれない。こうした安岡の反応は「私小説家」としての藤枝という作者に関する印象がその読み対して先行しているようにも思われる。この「私小説家」としての藤枝静男に着目し、それを詳細に述べたのが、旧制八高以来の友人である平野謙による「文芸時評」(「毎日新聞」昭和四十二年七月二十七、八日夕刊)であろう。平野は「「空気頭」は今月の小説として注目すべき作であるだけでなく、この作者の作品歴に即しても注目すべき作である」として以下のように述べている。

たとえば太宰治の私小説は「われを許せ!」という訴えを基調にしているというのがむかしからの私の意見である。したがって藤枝静男流にいえば、他人の同感を求めるための私小説ということになり「女々しい」などという属性もおのずとそこから生ずることになる。しかし、この「空気頭」はそういう太宰治流の自己容認を念願する私小説ではなくて、文字どおり自己とはなにかを本質的に追求しようとした私小説として、私は読んだのである。無論、作者がいままで書いてきた自分の私小説はいわば太宰治流の私小説にすぎなかったというとき、なんとおのれを知らぬ言を吐くものかな、という感じをとどめあえなかった。志賀直哉(瀧井孝作でもいい)と太宰治とをひとつの文学的な対極とすれば、藤枝静男が志賀直哉的ポールに近いことは、ほとんど自明の理みたいなものに私には思える。おそらく作者の真意は、志賀直哉的手法では描ききれない自己の真実に迫りたい、というところにあったのだろう。

また平野は「あるいは志賀直哉流の私小説と太宰治流の私小説をアウフヘーベンする私小説の存立を、ひそかに夢想したのだろう」とも述べている。こうした指摘は、「空気頭」の中で語られる「私の私小説」という多義的言辞に対する平野流の解釈であるとともに、同時代評としては藤枝の「私小説」をめぐる問題のある種の核心を突いたものとして、優れた作家論となっている。ただし平野の書評にもその兆しが見られるが、「私小説」を超えた「私小説」であるという「空気頭」の書評一般に対して作者藤枝は不満点があったらしい。それを次のように述べている。[4]

これも極端な言い方かもしれぬが、私は自分の思想を表現するには私小説がいちばん適当していると考えている。それで悪ければいちばん手っとり早いと考えている。平野謙がいったように、当今のいわゆる世界観が思想では決してない。また人間関係を描くだけが小説でもない。志賀直哉の私小説「城の崎にて」

は第一流の思想小説だときめているから、自分ももしできれば、ああいう立派なものを書いてから死にたいと念願している。

だから私はこれからも私小説ばかり書くつもりでいる。今度の私の「空気頭」だって「私の私小説」である。ああいう抽象画を持ちこんだような変なやり方について「私小説からの脱出」だと言ってくれた人があったが、私は脱出しなければならぬほど私小説を悪いものだなどとは毛頭考えていないのである。

あくまで「私小説家」であろうとする藤枝は、頑なに「空気頭」を「私の私小説」であると主張している。そこには藤枝なりの拘りが垣間見えるが、この藤枝の「私小説」の問題系は、それを考察しようとするならば自ずと作家論が要求されるのだが、拙稿ではより近視眼的に「空気頭」に焦点を絞ってその読みに目的を置くため、この作家論を含めた問題系については別稿に譲りたい。ただ「空気頭」の研究、特に作品論[5]としては、数えるほどしか現在提出されていないが、その多くはこの「私小説」の問題とからめて論じられている。すなわち第二部を含んだ「空気頭」が、どのような意味で「私の私小説」なのかを解明しようとしているといえるだろう。こうした「空気頭」を読む上において「私の私小説」をどう考えることができるのかということについては、拙稿でも「空気頭」においてという限定がついてしまうが、その解釈を試みてみたい。またその際どうしても第二部のテクストにおける位置づけが考察されねばならないが、しかし同時に第二部は藤枝のプレテキストを含めた他のテクストからの引用が甚だしく、いわばこの間テクスト的問題系の究明も先行研究で行われている。特に宮内淳子氏のものにこの点についての詳しい研究がある[6]。以下拙稿では、この点にもう少し付け加えられる点があると考え、「空気頭」の間テクスト的問題点を取り上げてみたい。またそれを視野に入れながら、「私小説」からの逸脱やズレを感じさせてしまうこのテクストをどのように読みうるのか、すなわち「空気頭」単体でのテクストの読みはどのようになるかということを考えてみたい。

二　コラージュ――「私」として統合すること

これまで触れてきたように「空気頭」第二部はプレテキストを持つと同時に、いくつかの先行するテクストからの多くの引用によって成り立っている。このことについて藤枝本人は「空気頭」解説でその意図を次のように語る[7]。「空気頭」成立への経緯を知るために以下引用しておきたい。

書き方では「空気頭」の真中の部分だけが新奇にみえるかも知れないが、実際は反対で、十一年ほどまえ同じ題名で雑誌「近代文学」にのせてもらったものの焼き直しである。

ひとのことなんか、いくら想像をたくましくしたところで知れたものだから、自分のことを書くしかないと思って努力してきたが、これまでの自分の文体では結局それも駄目だと感じた。そのとき前から不満で気になっていたこの短篇を想い出し、多少はヤブレカブレの気味もあって、改変を加えてはさんだのである。

絵の方で（何と云ったか忘れたが）新聞紙でも写真でも手当たり次第に貼りつけて画面を構成するやり方がある。改変するときそれを使ってやろうと考えて、文献、友人たちの書いたもの、云ったこと、教えてくれたことをほとんど生のままに貼り合わせて、

逸脱を承知で書いた。ひとつひとつのことがらに根拠があるから、全体としての実在力はある。このために力をかしてくれた福岡徹、佐々木基一、中山恒明、新島迪夫の諸兄に感謝している。

ここでは「空気頭」に「近代文学」に載った先行テクストがあることが語られており、またコラージュを意識した方法によって小説を書いたこと、そしてその引用文献の著者たちの名が記されている。しかし藤枝は、故意かそれとも単に失念したのか、「近代文学」掲載の「空気頭」（以下「空気頭（初稿）」）の他に別のプレテキストがあったことを書いていない。以下まずはその異同に関して考察を加えてみたい。[8]

「空気頭（初稿）」「気頭術」は「空気頭」の第二部のプレテキストであることについては先に触れた。特にB子の情事とそれに伴う脳内のウィルス（「気頭術」ではウィルスではなく「遺残細胞X」となっている）の活性化、および活性化に伴う上半盲という視覚障害（「気頭術」ではこの点はない）、性欲の減退、加えてそれを増進するために糞食をすること、最後に空中に浮く体験をし脳内に空気を送り込む療法を施術していることなど、一部文章そのものとモチーフにおいて共通している。例えば空中に浮く場面は比較すると以下のようになっている。

——すべて好い。

と己は呟いた。が、しかし一体すべてとは何なのか、内容は己にもさっぱり分らなかった。とにかく己の頭は空っぽなのに、己の心は満ち足りていた。

己は、自分が今までの煩瑣な、あらゆる苦悩から全く解放されているのを感じた。蟻は蟻だ、机は机だ、人間は人間だ、そして己は己だ。そうして、そう云う己が、そう云う蟻や机や人間を今眺めているということを、痛切に己は感じた。

——心が自由になると、何もかも好く分るものだなあ。

耳の近くで須永が呟いた。（「空気頭（初稿）」）

「ああ」

と多田は呟いた。彼は自分が今までの煩瑣な苦悩から全く解放され、本当の自分に戻ったことを悟った。

「心が自由になると何もかもよくわかるものだなあ」

耳の近くで須永が呟いた。（「気頭術」）

「空気頭」ではこの空中浮遊の場面でプレテキストでは須永に当たる安富君が、「心が自由になると、何もかもよく見えるものだなあ」と呟いており、この場面に関する限りほぼそのまま現行「空気頭」でも使われていることが分かる。

しかしテクストの生成過程を考えるならばより重要になってくるのは、その差異である。まず大きな違いは、「空気頭（初稿）」「気頭術」では語られる内容は第三者の報告であるということである。例えば「空気頭（初稿）」では「——と東京医科大学中退の精神薄弱性インポテント患者A君は語りはじめた」と冒頭語られている。それゆえか「空気頭」でも第二部では文末が「です」「ます」調になっており、第一部第三部が全くの独語に近いのに比べて、第二部は読み手を意識した文体となっているが、その第二部も「空気頭」全体に共通する「私」という人称で統括されている点は、プレテキストとの大きな違いといえるだろう。また「空気頭（初稿）」では脳内のウィルスは外因性であること（第二次大戦中ビルマで後頭部を銃撃された時に感染）が遺伝的なものと変更されていること、加えて「人糞ふりかけ」の挿話が

プレテキストでは雑誌で読んだ話となっているのが、実際「私」が見た話へと変更されているなどの違いがある。すなわちプレテキストにあった第三者の話や経験が「空気頭」では「私」の経験として語り直されているのである。

またプレテキストから現行テクストへの改変中、削られたエピソードもある。それは「穢医穢」という言葉が出てくるエピソードなのだが、先行テクストでは釈迦が「女人」は「どうしたら成仏できるか」と、ある婆羅門に尋ねたところこの言葉が出てきたとされている。そこから主人公は人糞を食することで精力増強をはかり交際相手を圧しようと思いつくのだが、この糞食が女性への功徳であるというエピソードが削られたために、なぜB子から人糞の臭いが発し始めるのかという点が現行テクストでは分かりづらくなっている。

こういう点を含めて「空気頭」の第二部はプレテキストである「空気頭（初稿）」「気頭術」に大きく依拠することによって書かれたことになるが、この第二部はまた藤枝自身の別のテクストが下敷きとして使われていると思われる。その点について新たに指摘しておきたい。それはA子に関する記述であり、これは「明るい場所」（「群像」昭和三十三年八月号）が基になっていると考えられる。「明るい場所」と「空気頭」とではともに横須賀の海軍工廠に付属する病院で医者の主人公が看護士の女性と性的交渉を重ねるものとなっている。ただこれに関しては「空気頭」のプレテキストとの関連と異なって、本文をそのまま引用するというものではなく、あくまでモチーフ上の類似という限定的なものであるが、少なくとも作者によって意識されていただろうと思われる。

こうした自作からの引用や改変とは別に「空気頭」のコラージュを特徴づけているのは、先に挙げたように友人・知人からの文章の引用である。まずは挙げられるのは「空気頭（初稿）」の成立において大きく影響した佐々木基一の「停れる時の合間に」である。これについては藤枝自身が次のように言っている[9]。

ところで現在形の「空気頭」は、私にとってはひとつの発展であったと思っているが、佐々木基一氏の小説中の一場面を氏の許諾を得て使った。今度この著作集の第六巻に初稿と現在形の双方が収められたので、この「写し」部分の（原作）をそのままに引き写して掲げておきたい。この小説は雑誌『近代文学』創刊号（昭和二十一年一月号）に埴谷雄高氏の「死霊」とならんで長篇の第一回として発表され、しかし何故か年末の十一月十二月合併号を最後として第五回をもって中絶してしまった「停れる時の合間に」の冒頭部分で、主人公須永が敗戦直後の上野駅構内で突然の白昼夢に似た瞬間を経験する場面である。

そして引用されたのが「停れる時の合間に」での主人公が空中に浮かび上がる場面なのだが、もちろんこれが「空気頭」での空中浮遊の場面に転化されているのは作者の述べる通りである。しかし藤枝が引用したのは体が宙に浮くという箇所だけにはとどまっていないと思われる。既に指摘[10]があるが、「停れる時の合間に」の主人公須永が雪降る高原の林をぬけるとぼんやりと月が見える場面も同様に「空気頭」に使われている。

そのとき須永は、ふと、いままで自分の全く知らなかった何かゞ、漸く自分に分りはじめたやうに思つた。

「心が自由になると、何もかもよく分るものだなあ」

すなわち「空気頭」で体が中に浮くことで得られたある種の達観的感

興を促す「安富君」（先行テクストでは「須永」）の一語からして引用なのである。またこれまで指摘のなかったもう一点、「停れる時の合間に」第三節で須永の幼少時の体験として以下の様な場面がある。須永こと「僕」は叔父の家で薬湯と称し夏蜜柑の皮を入浴中の叔父家族に投げつける遊びをする。その後入浴後の叔父を「僕」は二階の手摺りに見付ける。[11]

二階の手摺に凭りかゝつて、叔父が笑つているゐるのだ。絵本に出て来る爺さんそつくりな、白い眉毛が笑つてゐるのだ。僕は石段を駆け上つて、家へ走りこんだ、叔父はきつと面白がつて笑つてゐるに違ひないと考へたのだ。だが、叔父は傍へ走り寄らうとした刹那に、僕はもう畳の上に投げ転ばされてゐた。チェッといふ厳しい舌打ちの音と、赤らんだ叔父の顔。僕は立上つて逃げようとしたとたんに、再び畳の上へ投げ出された。チェッといふ舌打の音、赤らんで引緊つた顔。これは裏切りではなかつたらうか。

遠く志賀直哉の『暗夜行路』の冒頭を反響させているとも思えるこの場面は、「空気頭」で「私」が公園の滑り台で遊ぶ子どもを地面にたたきつける空想の場面に似てはいないだろうか。もちろん「空気頭」のこの場面は第一部のことであり、「停まれる時の合間に」は第二部のそれも「空気頭（初稿）」の下敷きとなったテクストである。それゆえそうした規定から外れてしまうが、新たに現行「空気頭」を書く際に、作者によって再びこの「停まれる時の合間に」が念頭をよぎったとも考えられる。

加えて既に指摘[12]されているが藤枝の「空気頭」は福岡徹（本名冨安徹太郎）の「新・糞尿譚[13]」に大きくよっている。さらには内容だけでなく福岡の本名は友人の名として、また掲載雑誌名はキャバレーの名として「空気頭」で採用されている。これらは改変後の「空気頭」に新たに挿入されたものである。

こうして現行テクストである「空気頭」は多種のテクストによって「空気頭（初稿）」を大きく膨らませ、また初稿から現行テクストへと改変もなされていた。その特徴は一言でいうと、第三者の言葉なり体験なり見聞なりが、すべて「私」の体験へと統括されているということである。例えば「空気頭」は佐々木や福岡のテクストを取り入れるのだが、それはもはや引用というよりも完全に自分の文章に組み込んでいるという意味で行為自体はむしろ剽窃に近い。また先行テクストでは第三者の報告としてあったものを、「私」の経験として「空気頭」では改変されていた。すなわち「空気頭」は様々なテクストを「私」のもとに統括しようと作者の手が動いているのであり、藤枝が言うようなコラージュという異質の素材を繋げて意想外の効果をもたらそうとする技法というよりも、種々の話をどうにかして「私」の小説へとしようとする意志によって貫かれているといえる。事実作者のコラージュの告白が無い限り、「空気頭」が藤枝の言うようなコラージュを企図したテクストであるとは認識されないはずである。ではそうした「私」の物語をどのように読むことができるのだろうか。

三　裏切りと他者

先に述べたように「空気頭」は第一部では「私」によってその妻の結核闘病が語られながら、第二部で一転「私」の頭の中に巣くった病

原菌とのいわば闘病生活へと話が変わり[14]、第三部ではさらに「私」の日記の記述へテクストは変遷していく。こうしたテクスト中での一見無関係に見える連なりが読者にテクスト内のズレを意識させ、引いては「私小説」とのズレをも意識させることになると考えられるが、しかしそうした中ほとんど唯一このテクストで変わらないものは、「私」という語り手の存在である。「空気頭」のある種のズレを理解するために、この「私」にここで着目してみたい。「私」とはどのような存在なのだろうか。

少なからず分かることは、「空気頭」の「私」にとって「自己嫌悪」こそが自らを規定する何かであろうし、またその背景には「私」の「倫理」観があるということである。こうしたことを「私」は次のように語っている。

> 実存世界の不条理という言葉がある。私は、自分一個の精神生活も肉体生活も、これまで不条理に支配されてきたことを認めざるを得ない。しかし同時にそのことに嫌悪を感じてもいる。たしかにそれは自分の力でどうにもならぬことであったかも知れぬと思う。しかし私には、そういう見方が、人生に対するただの解釈であって、自分の内部に於ける強い倫理となり得ないということが不満なのである。

「実存世界の不条理」をそのまま肯定するよりも、「自分の内部に於ける強い倫理」を求める「私」は、「そういう自分を、それが自分だと思い諦め得ない己の愚図」に「自己嫌悪」している。そしてこの「自己嫌悪」は、「自分の内部に於ける強い倫理」観の下にあのようになれたかも知れない自分とこのようでしかない自分とにこだわり続ける自己執着のネガティブな陰画であると考えられるだろう。もちろん、この種の「自己嫌悪」は「私」に限ってのことではなく珍しいものではない。しかし「空気頭」においてこの「自己嫌悪」が独自の光彩を放ち始めるのは、それが「私」の行動を規定し始める点においてである。それはおそらく第三部における一日の日記としては異様に長い、詳細きわまる記述にその痕跡を求められようが、よりはっきりするのは「私」の肉親に対する態度においてである。「私にとって、肉親の見苦しい姿は、そのまま理屈抜きに私自身の醜さとして映る」という「私」には、肉親は鏡としての「私」にほかならいと意識されている。それゆえ満員の電車の中で苦しそうに立っている妻にも、抜歯を痛がる娘にも怒りを覚えるのだが、それは同時に鏡に映された「私自身」である以上、「倫理観」に照らし出された自己嫌悪の発露の一形態なのである。しかしまた同時に「私」は、そうした肉親への態度に対して「一度だって人間らしい自然な態度で接し、やさしく親愛の情を示したことがない」と反省もするのだが、これは正確には正しくない。というのも「私」が妻を含めた肉親に「親愛の情」を持つことが確かにあるからである。ただしそれは相手が死んでいるという条件が付くことによって初めて成り立つものなのでもある。つまり肉親の姿がそのまま自己として映らなくなり、相手の姿が自己嫌悪を引き起こさないという「死」の状態の時、「私」は自分を離れた自分として「親愛の情」を示すことが出来るのである。例えば妻に対して「はじめて心からの愛情」を感じるのは次のような場面である。

> 私は妻を哀れに思い、愛を感じた。半分死人となった妻に、はじめて心からの愛情を持った。

こうした「私」の感情の動きは、死んだ家族の眠る墓への執着としても表れているし、また「死は今の私にとっては、むしろ反動的に、平

安に満ちた休息の場所として空想」されたりもし、ついには「今日は妻の死んだときのことを楽しく空想」することにも繋がっていく。このような「私」は妻に「あなたはどんな時でも御自分が正しいと思っていらっしゃるのよ」と非難されたりもするのだが、この「私」の自己執着という形で表れる「強い倫理」観ないしは調和的世界の希求はしかし、常に「実存世界の不条理」によって脅かされ続けなければならない。では「実存世界の不条理」はどこから来るのだろうか。それは自己とは遠く隔たった他なる場所にいる他者からである。すなわち「空気頭」は「私」の希求する調和的世界が、常に他者によって脅かされさらには裏切られ続けるというモチーフによって貫かれていると考えられるのである。

例えば「空気頭」ではしばしば同じような場面に出くわす。妻の入院に際して先日の葬式の供物を見舞品として送った婦人、また拘留中に出会った人の良さそうな刑事の突然の暴力、あるいは妻の一緒の墓には入りたくないという言葉などがそれである。[15] これらのモチーフは「私」が不意に出会う他者の他者性の顕現であり、それは「私」に対する裏切りという形で「私」には受け取られる。

だがこのテクスト中でしばしば「私」に対する他者として現れ、常に私を裏切りつづけるのは、妻の肺で増殖し活動しつづける結核菌であるという点に注目しておきたい。「私」は結核菌を次のように認識している。

兄が死ぬ少しまえ、枕元に坐った私にむかって「この病気には神も仏もない」と絶望的に云った。想い出すたびに、胸が潰れるような悲しみと怒りで、ほとんど逆上した。その憎悪が、そのまま妻の胸の奥に潜む結核菌に注がれた。結核菌という名称は、何年も何年も前から、もはや私にとっては医学上の普通名詞ではなくて、不断に顔を突きあわせた固有名詞となっていた。

「妻の胸の奥に潜む結核菌」は回復したと思うとまた再発し、治療を施したと思うと増殖するというように、常に妻をそして「私」を裏切り続けてきた。そうした結核菌という他者に対して「私」は憎悪の念を燃やし続けている。しかしこうした結核菌に代表される「私」の嫌悪する他者の他者性は、実際は「私」自身も持っているものにほかならない。例えばそれは次のように気づかされる。

すこし離れて、切花を持って立っていた妻が、不意に、思いつめたように

「わたしはこのお墓に入るのは嫌です」

と云った。すると反射的に、（裏切られた）というような、異様な不快感が私を襲った。

——あれが俺だ。

さめかけたコーヒーを啜りながら、そのときのことを私は思い出していた。裏切ったのは俺だ。ほとんどゾッとするような暗い気持ちが私の胸をひたした。

こうした妻を「裏切った」という「私」自身の持つ他者性について、「私」は公園で遊ぶ子どもへの突然の暴力というようなものを空想するのだが、それらが「ゾッとするような暗い気持ち」を引き起こすのは、「私」の中に「私」の関知しない他者が潜んでいるということに気づいたからにほかならない。すなわち「私」の嫌悪する他なるものとは、「私」を取り囲む「実存世界の不条理」にだけ由来するものではなく、「私」からさえ発露するものだったのである。「私」はそれをどのように剔抉することが出来るだろうか。それが問われているのが

「空気頭」の第二部に他ならない。そこでは直前の「夫婦は二世」という言葉に相応しく、妻の体に結核菌が巣くっているように、「私」も保菌者としてそれへの執拗な治療が語られるのである。

第二部において「私」を犯している病とは、「遺伝性」の「ヴィールス類似の起炎菌」によって引き起こされるものであり、症状としては上半盲を起こすと同時に激しい性欲をかきたてさせるものである。しかし同時にそれは実際女性との性交渉の場面においては常に不毛へと導くものでもあった。すなわち「遺伝性」としてより自己に密着した病原体でありながら、最終的にそれは自分自身を裏切ってしまうのである。

これに際して「私」の採った行動は、まずこの起炎菌を増殖させることで性欲を増進させ女性を圧しようとすることであった。つまりこの時「私」は自己の他なるものをいかにコントロールするかということに躍起になっているのである。だが容易に想像がつくように、それは終局的にはうまく行かない。他なるものは如何に密着しようとも他であるほかないからである。ではその解決はどのようにしてもたらされるのであろうか。「空気頭」第二部はそうした「私」の状態から「私」はいかに解放されるかという問題へと移行していくと思われる。それはB子から糞臭がしだし、しだいに「私」自身がB子から離れ始めたこと、そしてB子を見ていた目がふと自然へと向いた瞬間に「息を吐きたくなるような開放感」として「私」に感じられる場面からである。性欲増進とその対象であった女性から目を背けること、「私」の中にある「起炎菌」があたかもないような状態にすることがそれである。すなわち「私」は起炎菌をコントロールするのではく、隔離しようとするのである。それが安富君との体が空中に漂う経験を契機に考案された気頭療法なのであった。

しかしそうした病原菌の隔離は、実際は「私」の「私」からの解放をも意味してしまうのである。なぜなら「空気頭」で語られる「私」が「私」であろうとする同一性への志向は、実際はそれを常に脅かそうとする他者によって担保されてきたものだったからである。そしておそらくそのことにも自覚的な「私」は、こうした「私」と他者との関係から一気に解放されようとしていると考えなければならない。「私」はそうした解放状態について次のように語っている。

私は、ちょうど私たち二人が空間をへだてて下界を俯瞰していた時のように、私の脳下垂体と視神経交叉部との中間に空気を導入してその接触を「離断」しなければならぬ、と思いました。私に遺伝し私につきまとって来たあのヴィールスの増殖は、それによって制圧され、私は過去の私自身から物理的に脱却することができるのです。あの厭わしい重圧感や、地面を這いまわることしか知らぬ醜悪な蛾の幻影から解放され、遍満する光のなかにとり戻した完全な視野を通して、両眼を遠く天空の彼方に放つことを得るのです。――そのときがやっと訪れた、と私は思いました。

だがこうした「私」の企みは成功したとは思われない。例えば全く解放された状態が「すべて好し」なのだとしたら、「私」の到達した地点は「それでもよい」という現状是認の地点なのである。

――しかし、私はそれでもよいと思っています。いったん道をみつければ、後は努力次第です。だから私は努力してこの装置に改良を加え、結局は空気で私の全脳髄を充満させ、完全な空気男になってフワフワと昇天してみせる決心でおります。

「私」の努力と決心はしかし順調に進捗することはないだろう。なぜなら第二部の冒頭で「私」にはM子という愛人のいることが語られているからである。つまり事態はそれほど進展しておらず未だ継続中なのである。それゆえ他者を隔離し自己を解放しようとする「私」の企てもやはり「私」が考えるようにはうまくいくことはないと予想されるのだが、「すべて好し」という高みから、「それでもよい」という地点へと降り立つ「私」には、「私」の考える解放からはほど遠いものの、常に他なるものに脅かされる自己をそのまま受け止めようとする力強ささえ感じられるのである。

四　結

結局のところ事態の打開という点においては大きな進展を見せなかった「私」の第二部での冒険は、それゆえ第三部で再び地上に舞い戻るしかない。第三部はこれまでとも異なり日記の記述となっているが、そこでは「偽善者が自分の通り相場になっている」場面に出くわし、再び、他人を裏切り続けているという自己に嫌悪したりする相変わらずの自分が語られている。しかし「私」は昔見たベトナム戦争の記録映画を想い出しながら次のように考える。それはおそらく「それでもよい」と決心した第二部の「私」と響き合っているだろう。

――この若い小綺麗な男、平気で弱いものに冷酷になれる人、味方に似たふるまいを見せていて裏切る人、そういう人は沢山ある。そして、平生の生活で自分がその一人だという自覚がある。

ここではそういう自分に対してどのような感情を抱いているのかもはや語れていない。おそらくはそれについて「私」は嫌悪することもあろうが、やはり「それでもよい」という認識に落ち着くのではないだろうか。そしてそれは「空気頭」の冒頭で語られる「それが自分だと思い諦め得ない己の愚図に対する不快の念」へのテクスト内での解答にもなっていようが、ただし「空気頭」それ自体はそうした諦念だけによって成り立っているのでなく、そこから導き出された開き直りにも似た力強さによって成立しているのである。すなわち「ふたとおり」あるという「私小説」の、実際はそのどちらでもない「私の私小説」が語られてしまったこと自体がそれへの証左となってはいないだろうか。

注

（1）私小説にカギ括弧をつけているのは、一つには私小説概念に対して、多くの優れた研究があるものの、未だはっきりとした定義を下すことが出来ない状況論的な要請による。またもう一つは藤枝静男自身が用いる私小説という語が、「空気頭」にも見られるように、藤枝流の意味づけがなされていると判断したためにあえてカギ括弧をつけることにした。

（2）便宜上「空気頭」を三部に分けて考察した。第一部は「私小説」に対する言辞と妻の闘病に関する記述、第二部が「私」の気頭療法に関する部分、そして第三部が「私」の日記の箇所と区分けしている。

（3）青木鐵夫編『藤枝静男　年譜・著作年表・参考文献』（発行者青木鐵夫、平成十四年三月）を参照した。

（4）「私小説家の不平」（「サンケイ新聞」昭和四十三年四月十三日夕刊）

（5）拙稿では直接言及できなかったが、例えば名和哲夫「藤枝静男へのデリダ

的アプローチ―「空気頭」の私小説性」（「浜松短期大学研究論集」第六十巻、平成十五年十一月）、小嶋知善「藤枝静男「空気頭」論―私小説の可能性」（「大正大學研究紀要　人間學部・文學部」九十号、平成十七年三月）、佐藤淳二「〈差異〉の身体＝機械学―藤枝静男『空気頭』論」（中山昭彦編『機械＝身体のポリティーク』平成十八年十一月、青弓社）などを参照した。

（6）「藤枝静男『空気頭』―〈でたらめに書く〉ということ―」（「国文」第八十七号、平成九年八月）。

（7）「あとがき」（所収『空気頭』昭和四十二年十月、講談社）

（8）プレテキストとの比較研究を行ったものに名和哲夫「藤枝静男『空気頭』の成立について―『空気人形』『空気頭（初稿）』『気頭術』そして『空気頭』の四つのテクストをめぐって」（「浜松学院大学短期大学部研究論集」三号、平成十九年年三月）がある。また拙稿では「みづうみ」に連載された「空気人形」全体を現時点で見ることが出来なかったために、以下の記述で触れていない。

（9）「著作集を終えて」（所収『藤枝静男著作集　第六巻』昭和五十二年五月、講談社）

（10）注（6）に同じ。

（11）引用は「近代文学」昭和二十一年十月号に拠った。

（12）注（6）に同じ。

（13）「日本きゃらばん」第十二集、昭和三十九年八月、第十五集、昭和四十一年七月。

（14）第一部と第二部との模倣的関係については蓮実重彦「藤枝静男論　分岐と彷徨」（所収『「私小説」を読む』昭和六十年十月、中央公論社）で既に指摘されている。

（15）藤枝静男のテクストにおける女性の他者性については、注（14）の蓮実氏の「藤枝静男論　分岐と彷徨」で詳しく論じられている。

付記　「空気頭」の本文引用は『藤枝静男著作集　第六巻』（昭和五十二年五月、講談社）を使用した。